ワーッと労働市場に出てきています。このあたりのことも少し見ていかないと見誤ることになるのかなと思います。

現在の私の結論としては、マレーシアの新経済政策の下で進めてきた社会構造の変化や経済構造の変化が、新経済政策を実質的に政治で支えていた仕組みとのあいだに齟齬を来しはじめていて、このような選挙結果になってきているのかなと感じています。

＊

山本さんから三つの論点が出ていますが、私は２点目についてだけ山本さんと意見を異にします。二つ目の論点の「連邦制は実質化するか」について、資料には「半島部では州の権限はきわめて限定的であり、中央集権に近い統治が行なわれてきた」とあります。たしかにそうなのですが、やはり州には土地、水、森林、宗教といった権限が与えられている以上、かならずしもそうは言えないと思います。この論点に関しては私はニュアンスが違います。

コメント２

金子 芳樹
獨協大学

私も特別な準備ができませんでしたので、今日の６人のお話を聞いた範囲で頭に浮かんだことをいくつか述べようと思います。

得票率と議席数が上下を繰り返す傾向が崩れた2013年総選挙

まず、今回の選挙の結果については、基本的に、政権交代が起こらなかったという意味では現状維持となったわけですが、長らくこの国の政治史を見てきた者、1959年の最初の選挙から見てきた者としては、一つ注目すべき変化があったと思います。それは中村正志さんが紹介してくれた資料にある、過去の総選挙における「与党連合（連盟党／国民戦線）の議席占有率と得票率の推移」という部分です。

得票率と議席占有率の格差があることは今日何回も出ましたが、おもしろいことに、資料18のジグザグした、つまり、得票率と議席数が上がったら次の選挙では下がり、下がったら次の選挙で上がるというかたちは、両者がまったくパラレルの状態で一貫しています。しかも2013年の今回の選挙以外で、ジグザグが崩れた回は1990年に１回あるだけです。

その法則からいえば、1990年の総選挙ではBNの得票率と議席数は上がるべきところだったのですが、実際は下がりました。1990年の選挙は、ご存じのようにUMNOが決定的に分裂していた政治状況を反映した選挙でした。マハティールの政権基盤もいまひとつ安定せずにUMNOを割ってラザレイと闘っており、BNの本家本元がぐらついた状態にあった特殊な選挙でした。今回の選挙では、その過去に１回しかない特殊なケースと同様の動きが起こりました。

華人票をほとんど取り込めずとも勝利するBNの手強さ

マレーシアの総選挙でジグザグ現象が起こる一つの要因は、先ほど鳥居高さんがおっしゃったBNに埋め込まれているシステムの一つで、一回落ちたら次の回に持ち直させる安定化システムがビルトインされているからだと考えています。先ほど塩崎悠輝さんから「（これまでの選挙で）PASの得票率はほとんど変化がない」というお話がありました。では、このジグザグを形成する要因になっていたのは何かというと、華人の得票率が続けて落ち込んだり、上がり続けたりしないようなバランス機能が発揮されてきた点が大きいと思います。

今回それが崩れたのは、華人のウェーブが本来なら行きつ戻りつするところを行ったままになってしまい、それこそ津波のように大きなうねりになったからだと受け止めています。その意味ではこれまでにない動きです。これをどのように考えたらいいのかについては、先ほど華人の投票行動について話がありましたが、そういうことだろうと思います。

ただし、私としては「それでもBNが勝つんだな」と逆に感じました。華人の票をほとんどBNに取り込めなくてもまだBNが勝っているということは、中村正志さんが先ほどおっしゃったように、野党からするとなかなか手強いということになるのかもしれません。以上はちょっと感想めいた話です。

マレーシアに二大政党制は定着するのか――対抗軸から考える

ここからは山本さんが提示された論点、とくにこの研究会のテーマにもなっている「二大政党制は定着するか」に焦点を当てたいと思います。すでに何人か

の方がおっしゃいましたが、長期的に現在の政党システムを維持しながら、政権交代が起こってそれが繰り返されるタイプの二大政党制が定着するかどうかを考えるとき、マレーシアの場合は対抗軸をなにに求めるかがポイントだと思います。二大政党制といった場合、理念と政策がある程度は一貫していて、しかしながらそれらが基本的にかなり違うという政党もしくは政党グループが二つあることが一つの前提条件になります。

典型的なのはアメリカ合衆国だと思いますが、アメリカ合衆国の場合には、統治の原則や政府の形態としてなにを選ぶかというときに、いろいろな言い方があるのかもしれませんが、基本的には「政府の役割を大きくするか、小さくするか」という部分が基準になると思います。そこから派生してさまざまな政策が決まってくる、分かれてくるといえるでしょう。この点は建国以来一貫している部分です。

これを二大政党制の一つの基本形と考えると、マレーシアの現在の二つの政党グループのあいだの対抗軸はいったいなんなのか。マニフェストがほとんど変わらない、類似性が高いという話もありました。実際に出てくる政策が似ていても、その奥にある理念が違っていれば二大政党制が成り立つかもしれません。しかし、現在のマレーシアについて理念として二つの政党連合の間にどのような違いがあるかを考えた場合、明確に説明できない部分があります。

「民族の政治」へのアプローチと開発、福祉は政治的争点になりうるか

たとえば、BNが民族の政治を追求するとすれば、PRはどうなのか。チェラマで「エスニシティ」という言葉を出さないようにしているという話もありました。しかし塩崎悠輝さんや篠崎香織さんの話を聞くと、表面的には出さないにしても、PRの構成党の少なくとも二つは、エスニシティに関する主張は結党以来まったく変わっていない。つまり、民族中心主義的であったり、宗教にこだわったりする面が強く、それを軸とした考え方を変えていない。そうであれば、一皮むくと基本的には「民族の政治」をかなり色濃く背負ったままなのかなという気がします。ここから派生した話をあとで少ししたいと思うのですが、民族の政治に対するアプローチの違いを突き詰めていっても対抗軸になりきれるかどうかかなり疑問があるところです。

それから、鈴木絢女さんがおっしゃったことですが、「開発か福祉か」に対抗軸を求めるとすれば、これはPRが今回いま一つ弱かった要因でもあると思うのですが、開発を抜きにしてこの国の政権を維持できるかという点を考える必要があります。福祉はもちろんけっこうです。福祉もGDPに貢献しないことはないと思いますが、大きく押し上げる力にはなりにくいと思います。PRの今回のマニフェストを見ると、経済の成長戦略についてアピールが弱かったのは明白です。

選挙後の、とくに経済界からの反応を見ると、明らかに「政権交代がなくてよかった」という反応でした。政権交代が起こってPRに政権が移ると不安定化して先が読めないということもあると思いますが、現在のPRの政策には力強く経済を引っ張り押し上げていくといった施策が不足していた面があると思います。

ですから、これから政権をほんとうに意識していく場合、開発の部分の政策の強化が野党側に求められます。BNもそれなりに「福祉は手厚く」と言っていますから、結果的にはわりと近づく可能性があり、したがってこの部分もなかなか明確な対抗軸にはならず、争点を見出しにくい感じがします。

そうなった場合、なにを軸にするかというと、中村さんが最初におっしゃったように、PRにとっては「善い人、悪い人」のレッテルを使って戦う、つまり長期政権およびそれが抱え込んでしまっているさまざまな既得権益や汚職を「悪」として、それらにチャレンジすることをアピールするくらいしかないのかもしれません。ただし、もちろんBNもこの点について改革を約束するわけですから、この点とて、そもそもイメージを越えて真の政治的争点にはなりにくい面があります。

選挙では有効な道具として機能したPRは政権交代後にどんなビジョンを出せるのか

このように、現在の与野党の成り立ちの基本的な構造から見る限り、二大政党制は難しい感じがします。とはいえ、状況は常に変化していますから、変化しているなかでなにかその軸になるようなものが生まれる可能性はないかという点が次の考えどころです。

政党レベルで見ると、PRという政党連合は選挙に対して強力な道具だったと思います。2008年の選挙と違って今回の選挙で得票率と議席占有率が近づいたことは、野党間の連携がうまくいったことによるところが大きいといえるでしょう。5年経ってDAPとPASの双方が互いをかなり認識し、相手への許容度を高めるといった学習がだいぶできるようになり、化学

研究会には30名の研究者、大学院生が参加

反応とまでは言えないまでも、学習効果によって互いを許容しあうかたちで調整能力を働かせることができるようになったのではないか、と私は見ていました。もともとは野合だったものが、互いの妥協のなかでBN的な「接点を求める」ことを学んできた面があるのかなと思っていたのです。しかし、じつはそうでもなさそうだという話が先ほどの議論であり、やや意外な感じを受けましたが、実態としては連携はさほど進んでいないのかもしれません。

逆に、先ほど申しましたが、ほんとうにPRが政権をとったときにどのようなビジョンを立てられるのかが疑問になってきます。「一度やらせてみよう」ということは一つの選択肢としてあるかもしれませんが、それで失敗した例はかなり身近でも見ていますし、そこのところはかなり危ういだろうなと思います。

MCAが入閣しないBN政権・内閣は理論的な正統性を維持できるのか

BNについては、MCAの話がずいぶん出ました。もしMCAが内閣に入らない、大臣を出さないということになったら、BNの基本構造が揺らぐことになります。多民族国家の運営方法として、各民族の代表が集まって国家の資源を民族間で分配する提携を行うことを基本としてきたBN体制が、そのパワー・シェアリングの構造を大きく崩壊させてしまうのではないかと思われます。ほんとうにMCAが入閣しないBN政権・内閣がありえるのだろうか、ここは大きなポイントだと思います。

昼休みに舛谷鋭さんと立ち話をしていました。舛谷さんは華人の政治家にお知り合いが多く、内情に詳しくていらっしゃいますので、あとで詳しくお聞きしたいのですが、舛谷さんは「MCAは運輸大臣のポストに人材を送るはず」というお話でした。やはりそうかと思いました。もしくは、これも舛谷さんのお話にあったのですが、DAPから大臣を引っぱってくる。そこまでしてでも華人を内閣に含めない限り、BN政権が理論的な正統性を失い、政権を維持できなくなるのではないかという思いは、UMNOのリーダーたちを含めてBN内にもあるだろうと思います。

極端な話、UMNOのだれかがDAPと連立を組む選択肢を考えていないとも限らない。そんなことも思い浮かびました。ぜひ舛谷さんにそのあたりの事情をお話しいただきたいと思います。加えてお聞きしたい点は、MCAがなぜ今回入閣を拒否したかということです。このロジックもたぶんおもしろいだろうと思います。

インターネットが変えた政治文化——「民主化」のグローバル化

それから「なにが変わったか」という点について、政治文化の話がずいぶん出ました。とくに伊賀司さんのお話の中心となっていた、都市的であるとか、若者、インターネット、新しいメディアといった点は、ある意味では1990年代後半ぐらいから世界のいろいろなところで起こっている現象と共通する面があると思います。最近で言えば「アラブの春」です。

それらとまったくパラレルで考えることは難しいと思いますが、昨今の民主化モデルに基本形があるとすれば、インターネットの空間は国内の民族間をつなぐだけではなく世界中をつなぎますから、どこかで成功した民主化モデルが他の国に移植されてさらに拡がる現象が連鎖的に起こっているといえるのではないかと思います。一般的なアジェンダの共通性に留まらず、「Corruption」ではなく「Transparency」

を使うといった言葉使いも共通していて、そのような状況がマレーシアにも入ってきています。それを「かっこいい」と見るかどうかは別として、「乗っかってみたい」と思う若者や人びとは確実にいて、そのような傾向が徐々に言論のスペースを拡げていきます。

1990年代のレフォルマシのときには、「マハティールを批判してもいいのだ」という認識が共有されることで言論に関する一つの堰が壊れました。今日の話にもありましたが、最近の選挙では「華人が街頭に出てデモをしてもいいのだ」という状況が生まれ、それが常態化するかたちで徐々にタブーが解かれていく現象が起こっているようです。インターナショナルな民主化モデルをベースにしながら、マレーシアでもこのような現象が確実に拡がってきたということです。簡単に一般論化していいとは思いませんが、そういう意味で、マレーシア特有の個別的な現象とはいえない、民主化のグローバル化の一側面といえるのではないでしょうか。

ただし、かといって、フェイス・トゥ・フェイスでさまざまなエスニック・グループの人たちが顔を合わせたときの態度も変わりつつあるかというと、そのところは未だ疑問の余地が残ります。私は最近あまり長くマレーシアに住んだり見たりしていないのでわからないのですが、この10年ぐらいを見て、たとえば大学のキャンパスでいろいろなエスニック・グループのメンバーがテーブルを同じくしてわいわい政治の話をするようになるところまで変わってきたのかどうか、どなたかにお聞きしたいと思います。バーチャルな空間では確かにそのような傾向が進んでいるだろうと思います。英語を媒介にして「同じようなことを考えている連中がいる」と発見することはあると思いますが、生身のリアルな空間でも、さまざまなレベルで実際の意見交換が拡大しているのかどうか、そのあたりはどなたかに教えていただきたいと思います。

ディスカッション

山本博之（司会） これから討論に入りますが、私が最初にあげた三つの論点について鳥居さんと金子さんからご意見をいただきましたので、まずそれについて私から応答してからみなさんに議論していただきたいと思います。

二大政党制の定着は難しく 今後のマレーシア政治は州ごとの分析が必須

山本　一つは、二大政党制は定着するかという話です。今日の議論を伺って、マレーシアは二大政党制が定着する方向に向かってはいないという印象を強めました。政権交代の可能性はあるとしても、安定した二つのグループがずっと維持される対抗軸が見つからないだろうということです。

そうなると、華人の代表を政府に加えるという話が出ていましたが、BNとはかたちは違うけれど包括的な与党連合を作らざるをえないということかと思います。現在のBNは民族別の代表が集まる「バリサン・ナシオナル」ですが、それとは違う代表を含めて、たとえば「バリサン・マレーシア」という別の名前をつけるという道があるのかもしれないと思いました。

二つ目は連邦制の話です。半島部の州の権限が限定的であるかどうかについては鳥居高さんと見解が噛み合わないところがあるかもしれませんが、ここで私が議論したかったのは、半島部の州に権限があるかどうかではなく、今後のマレーシア政治は州別に分析する方向を強めなければいけないのではないかということです。

たとえば「この州とこの州の代表が連邦の与党で、あの州とあの州の代表が野党」という語り方がされるようになるかということです。PRを見ても、連邦全体では三つの政党が連携していると語られますが、州別に見ると、この州はDAPの州、あの州はPASの州と見て、それらの州が連携したものを全体でPRと見ることもできるのではないかと思います。そうすれば、路線が大きく異なる野党どうしが連邦レベルで連携する道が開けるかもしれません。これは中村正志さんが最初に言った「今回の選挙を通じて研究者の枠組みを見直さないといけない」という発言にも通じると思っています。